

～今月の花木～

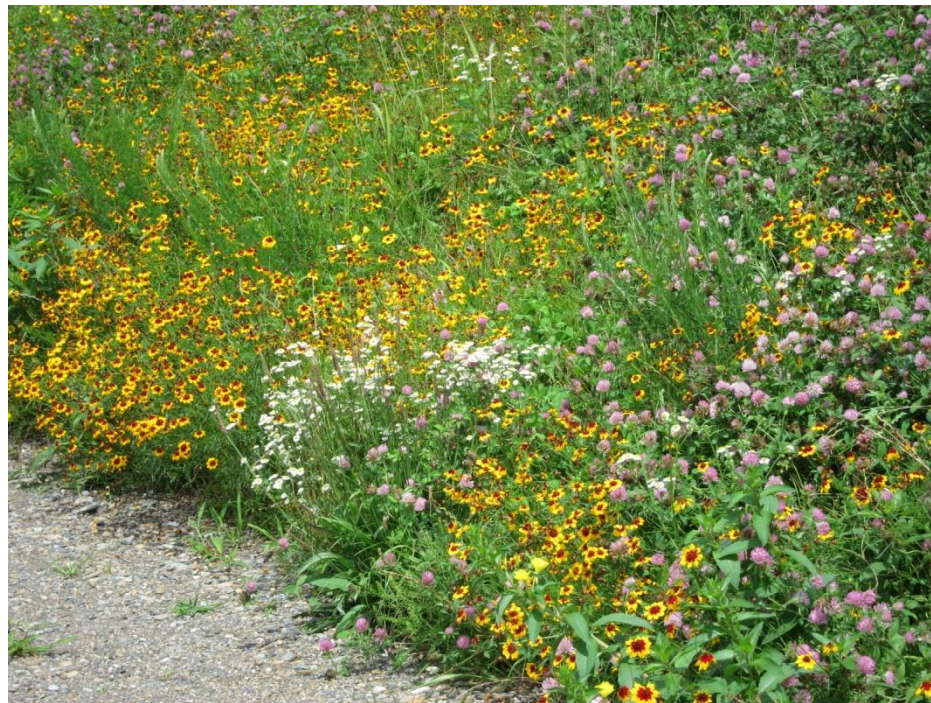


エンジュ 槐

マメ科・落葉高木・中国原産

エンジュの花は7～8月に咲く。似たハリエンジュ

(ニセアカシア)の花は5～6月に咲く。



外来種の草花に彩られた、多摩川の土手の一部

外来種の話

強い、はびこる、在来種を駆逐する…外来種と聞くと何だか悪いイメージが先行しますが、実際のところは、どうなのでしょう。

❖ 外来種とは…

元々その地域にいなかった生物で、人間が意図的、非意図的に関わらず持ち込んだ生物のことを「外来種」、「外来生物」などと呼びます。

また、外来種はどこから持ち込まれたのかにより、「国外外来種」と「国内外来種」に分けられます。これに対し、元々その地域に分布している生物は「在来種」とよびます。

外来種の中でも、在来種の生息・生育を脅かしたり、私たち人間の生活を脅かしたりする種は、「侵略的外来種」といわれ、各地で駆除などの対象となっています。特に生態系等に悪影響を及ぼす外来種については、外来生物法という法律に基づいて「特定外来生物」に指定され、飼育や栽培が原則禁止されています。某お笑い芸人が無許可でカミツキガメを飼育していたのが発覚して書類送検された報道がありました。これはカミツキガメが特定外来生物に指定されているからです。また、環境省が外来生物法による規制とは別に、生態系に悪影響を及ぼすものとして、「要注意外来生物」として指定している生物もあり、適切な取扱いが求められています。生態系を壊すなど、悪者としての掟えかたをされてしまう外来種ですが、勝手に外来種がやってきて悪さをしているわけではなく、元をたどれば我々人間が持ち込み招いた結果であり、外来種自体に罪はなく、この問題の解決には人間の関わりが必要です。

外来種

元々その地域に存在しなかったのに、人間の行為より導入された生物の事を指します。

国外外来種

日本の野外に生息する外来生物の数は分かっているだけでも約2,200種、そのうち植物が約1,600種にもなります。

ブラックバスやセイタカアワダチソウなどが有名で、北アメリカ原産のものが動植物共に多いようです。



ブラックバス



セイタカアワダチソウ

国内外来種

「北海道のカブトムシ」が一例で、日本国内の生物が、自然に分布していない他地域へ持ち込まれたものを指します。

ホタルやメダカなど、地域ごとに遺伝的特性の異なる生物が、別の地域へ放流された場合も、国内外来種になります。

意図的導入

古くは食用や観賞用が多く、近年では緑化植物や飼料（家畜のえさ）としての輸入が多いとされています。

明治中期に観賞用や飼料用として南アメリカより導入された水生植物のホテイアオイは、湖沼や河川に水面を覆うように繁茂すると、船の航行を阻害したり、腐敗して水質を悪化させたりしています。

非意図的導入

物流などにより、人間が意図せずにつ着や紛れ込んで持ち込まれたものを指します。

アレチウリやオオブタクサは、輸入大豆などに種子が混入し、持ち込まれたと考えられ、1952年に静岡県清水港で野外での生育が確認されました。現在では、全国的に広く確認され、他の在来植物の生育を抑圧しています。

外来生物被害予防三原則

侵略的外来生物による被害を予防するため、環境省では次の三原則を呼びかけています

① 入れない

～悪影響を及ぼすかもしれない外来生物をむやみに日本に入れない～

② 捨てない

～飼っている外来生物を野外に捨てない～

③ 拡げない

～野外にすでにいる外来生物は他地域に拡げない～

良かれと思って入れたのに、悪者になる

ハリエンジュ（別名ニセアカシア）という樹木があります。成長が早くてやせ地でも育つことから日本には早期緑化等の目的で北アメリカより1873年に導入されました。

しかし、その強い生命力が仇となり、各地で野生化し、他の植物の生育を威圧する、また、空中の窒素を固定化する能力があり、土壌を肥沃化し、生態系の基盤を変化させるなど、悲しいかな、最近では悪影響の方ばかりが、目立っています。

河川敷は外来種の宝庫

多摩川中流域のとある場所（下の写真）では、目に留まる多くの植物は、外来種でした。外来種が強いのか、在来種が弱いのか・・・



ハリエンジュ マメ科 落葉高木

北アメリカ原産。名のように、枝にはトゲがある。河川敷に繁茂すると、水の流れを妨げるほか、河川で倒れると流木となって河川構造物に堆積するなど、洪水被害を引き起こす懸念がある。

<要注意外来生物>



オオブタクサ キク科 一年生草本

北アメリカ原産。草丈は大きいもので 4m位になり、他の植物に届く光を遮ってその生育を抑圧するなど、在来植物に悪影響を及ぼす。秋の花粉症、ブタクサ花粉症の原因植物でもある。

<要注意外来生物>



アレチウリ ウリ科 一年生草本

北アメリカ原産。つるは長いもので 10m以上にもなり、地表や他の植物を覆いかぶさるように成長し、他の植物に届く光を遮ってその生育を抑圧するなど、在来植物に悪影響を及ぼす。

<特定外来生物>



ハルシャギク キク科 一年草

北アメリカ原産。明治初めに観賞用として来たものが、各地で野生化している。



ムラサキツメクサ マメ科 多年草

ヨーロッパ原産。シロツメクサとの対比から、アカツメクサともいわれる。



在来種と外来種のちがい…ネズミモチ

上の写真は在来種のネズミモチ（鼠竊）と中国原産のトウネズミモチ（唐鼠竊）の葉の裏側です。

性質、外観上も似た樹木ですが、見分け方のポイントがあり、左側の葉脈が透けて見えるほうがトウネズミモチ、「透（とう）ネズミモチ」とも、覚えることができます。右側が在来種です。



イタドリ タデ科 多年草

地下茎がよく発達し、群落をつくる。春先にでる若い茎は皮を剥ぎ、生食や塩漬け、炒めものにもなる。



クズ マメ科 多年草

根のでんぷんは葛粉となり、根の皮を乾燥させたものは葛根湯となる。初秋に紫色の甘く優しい香りのする花をつける。

日本から進出した強者

日本から進出した植物が、他国では「侵略的外来種」として問題を引き起こしている事例があります。

イタドリは、英国や米国に 19 世紀に観賞用や土壌の浸食防止用として輸出されましたが、特に英国では在来植物を駆逐する、舗装道路を破損するなどの被害が出ています。

クズは、緑化植物として導入された米国で問題となっています。つるをのばし、在来植物や家屋、電柱などに覆い絡みつくさまは「ジャパニーズ・グリーンモンスター」ともよばれ、嫌われているようです。

日本でも雑草としてみた場合、この 2 種は駆除の難しいものですが、古くから共に食用や薬用として利用やクズに至っては「秋の七草」の一つとする文化が日本には、あります。